

論 説

## 愛媛県鬼北町における座敷雛展示の作業工程とその記録化

淡野 寧彦 (地域資源マネジメント学科)

Documentation of the Method for Exhibition of “Zashikibina”, one of the doll festivals, in Kihoku Town, Ehime Prefecture

Yasuhiko TANNO (Regional Resource Management)

キーワード：座敷雛、住民活動、文化資源、愛媛県鬼北町

Keyword：Zashikibina (one of the doll festivals), Neighborhood Activity, Cultural Resource, Kihoku Town, Ehime Prefecture

【原稿受付：2020年1月9日 受理・採録決定：2020年1月23日】

### 要旨

本稿では、全国的に稀有な手法である座敷雛の展示に注目し、愛媛県鬼北町において1990年代半ばから25年間にわたって継続された座敷雛展示について、2018年3月に道の駅森の三角ぼうしで開催された展示を対象として、その作業工程を記録した。その際、この座敷雛展示が地域の文化資源としての価値を有するものとみなし、将来的にこの活動が何らかのかたちで復刻された際の情報源として本稿が活用されることも視野に入れながら、作業工程についてなるべく詳細に記述することとした。

鬼北町における座敷雛展示は、A氏をリーダーとする「きほく座敷雛保存会」のメンバーである住民有志数人によって実施され、10数畳ほどの舞台に雛人形と植物を主な原材料とする造景が展開された。この行事は3月下旬から4月上旬に開催され、町内2ヵ所の展示には数千人が訪れる恒例行事にまで発展した。本行事の継続には、保存会メンバーの知識・技術の活用や、メンバー同士の協力関係が有効に作用していた。保存会メンバーの高齢化を主な理由として、2019年の展示をもって本行事は終了したが、その文化的な重要性や再活用の可能性は高いと考えられ、その際に本稿の内容がいくばくかでも生かされることを期待したい。

### 1. はじめに

愛媛県鬼北町においては、1994年から2019年までの四半世紀にわたり、「きほく座敷雛保存会」(以下、保存会)に所属する数人の住民有志による座敷雛の展示が行われた。座敷雛の展示は当初、鬼北町広見地区のT商店が所有する建物で始まり、2006年からはやはり鬼北町に立地する道の駅森の三角ぼうしでも展示されるようになった。鬼北町における座敷雛の特徴として、単に雛人形を配置するだけでなく、植物や石などを用いた造景が行われ、十数畳程度の大掛かりな展示となる点が挙げられる(図1)。このためには、数日間にわたる準備作業やそれ以前からの原材料の収集、そして展示作業における様々な技術や創意工夫が必要となる。座敷雛の展示はおおむね、3月下旬から4月上旬の半月程度実施されていたが、これを見るために近年では毎年数千人が来訪した。

鬼北町の座敷雛展示に関する活動の経緯やその変化については、稿をあらためて記すとして、その展示活動が2019年春をもって終了したことから、今後、保

存会メンバーによる同様の展示を見る機会は失われた。先述のとおり、大がかりな展示によって数多くの人々の目を楽しませてきたこの活動は、地域にとっての貴重な文化資源であり、地域の歴史的一幕となりうる。主に保存会メンバーの高齢化を理由に活動自体が終了したことはやむをえない状況ではあるが、今後、地域の歩んだ道のをふまえた振興策等が図られる際に、本稿で取り上げる座敷雛展示にも注目が向けられる可能性はあると推測される。とくに、2000年前後から全国各地で地域振興策の1つとして雛祭りを活用する動きがみられ(古河(2018)、山田(2015))、伝統的かつ季節性のある行事としての関心は今後も広く継続すると思われる。しかし、鬼北町における座敷雛展示に関する作業内容は、保存会メンバーの中だけのいわば暗黙知としてのみ残されている状態であり、いずれ彼(女)らがいなくなってしまう後には、その詳細を把握する術はなくなってしまう。

そこで本稿では、座敷雛の展示に関わる一連の作業工程について、保存会メンバーと行動をともにしながら



図1 愛媛県鬼北町の道の駅森の三角ぼうしに展示された座敷雛  
(2018年3月筆者撮影)

らなるべく詳細に把握し、その内容を整理することで、鬼北町における座敷雛展示に関する記録を残すことを目的とする。これとともに、将来的にこの活動が何らかのかたちで復刻された際の情報源として、本稿が活用されることも視野に入れながら、作業工程についてまとめることとする。

以下、2章では座敷雛の概要を述べたうえで、展示に関わるメンバーの構成などについて述べる。そのうえで3章において、保存会メンバーが2018年3月に道の駅森の三角ぼうし（以下、森の三角ぼうし）において展示した座敷雛を対象として、その作業工程について現地調査をもとに記す。この際、作業に必要な労力や時間についても把握できるよう、本文中に明記した。4章では、鬼北町における座敷雛展示の作業工程において、とくに重要と考えられる内容をピックアップしながら作業全体を俯瞰し、作業工程の成立要因について考察する。以上をふまえて、5章において総括を行う。現地での調査は、先述のとおり2018年3月に実施したほか、2019年3月にも保存会メンバーからの追加の情報収集を行った。

## 2. 鬼北町における座敷雛展示の構成

### 1) 座敷雛展示の概要

日本各地で実施される雛祭りには、個人のものから組織による大々的なものまで多様であり、飾られる雛人形の大きさや種類、数なども様々である。一方で、冒頭でも述べたような雛人形の周囲に大がかりな風景を演出し、一体的な展示とする手法は稀有であるが、有名な例としては愛媛県八幡浜市真穴地区の「真穴の座敷雛」がある。まあな座敷雛ウェブページによれば、この雛祭りは、長女が生まれた家のみにおいて、旧暦上、その初節句となる4月2・3日の2日間にのみ実施するものである。この起源は、真穴地区南部の穴井集落において、1783(天明3)年に伊勢踊のワキとして穴井歌舞伎が創設されたことによるとされる。真穴の座敷雛は2002年に八幡浜市無形民俗文化財の指定を受けており、開催期間中には数万人が来訪するという。

真穴の座敷雛は展示スケールの大きさや華やかさなどから注目が集まったことから、近年では愛媛県内の他地域においても同様の手法による展示がみられるようになった。鬼北町における座敷雛も、真穴の座敷雛に由来するものとみられるが、これについては別稿にて取り上げる。鬼北町の座敷雛展示と真穴の座敷雛の違いとして、主に次の3点が挙げられる。第一に、鬼北町のそれはやはり旧暦に即して3月下旬から4月上旬に実施されるが、特定の人物の節句に合わせたもの

ではなく、毎年行事として実施されることである。第二に、真穴の座敷雛の造景には紙や着色したおがくずなどの人工物が使用されるが、鬼北町の座敷雛展示ではコケや枝木などの植物が造景の主体となる点がある。展示期間が長いことも含めて、後者の手法のほうが準備や管理の面で手間のかかる作業も多い。一方で、第三には、真穴の座敷雛は地区をあげての行事であり、多くの地域住民が連携して展示等の作業に当たるが、鬼北町の座敷雛展示では、冒頭で述べた通り、鬼北町の住民数人による小規模集団による活動であることも相違点である。なお、鬼北町の座敷雛展示に必要な経費について、保存会では展示に必要な実費を展示場所の運営主体から受け取る程度である。

## 2) 座敷雛展示に関わるメンバー構成

冒頭で述べたとおり、座敷雛展示を行うのは保存会のメンバーのみであり、その人数や構成員は変化しつつも、毎年数人のみでの活動が継続された。2018年の展示に関わったのは6人である。まず保存会のリーダーで、棟梁と呼ばれるA氏(男性・80歳代前半)は、活動当初からのメンバーであり、造園業を営んでい

る。座敷雛展示のレイアウト構想は、毎年A氏が行い、他のメンバーに指示を出している。A氏の他にB氏(80歳代前半)、C氏(70歳代前半)、D氏(70歳代前半)、E氏(70歳代前半)の4人がいずれも男性であり、女性はF氏(70歳代前半)1人のみである。作業工程において明確な役割分担が決まっているわけではないが、D氏はメンバーのスケジュール管理や会計業務を担い、F氏は自作した家屋などの模型を展示の一部として供出している。またC氏、D氏、F氏は小・中学校の同級生で旧知の間柄であるほか、E氏はA氏が営む会社の従業員である。6人全員が自動車を運転することができ、座敷雛展示のための植物収集の際などには、全員が自動車で現地へ向かう。この際、軽トラックを用いる者が多い。

## 3. 座敷雛展示の作業工程

2018年の森の三角ぼうしにおける座敷雛展示のための作業は、3月7日の原材料収集を発端として開始された(図2)。原材料収集は、鬼北町内の各地で行われ、毎年場所を変えて実施されるものもある。なお同日に収集された植物などは、同年のT商店での展

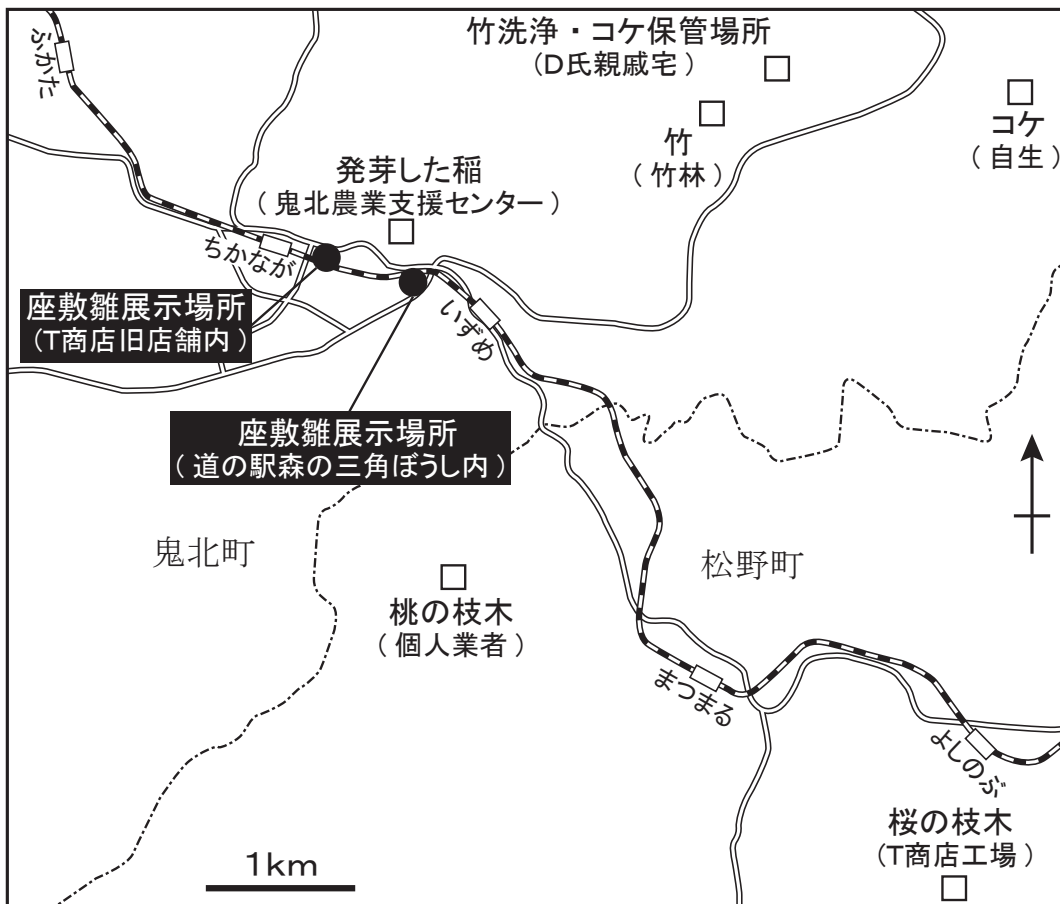


図2 座敷雛展示に必要な主な原材料の入手場所(2018年3月)  
(現地調査により作成)



示にも用いられた。森の三角ぼうし内での展示作業は3月19・20日(月・火)の2日間をかけて実施された。作業開始時には舞台上に何も無い状態から作業を開始し、数多くの物品を搬入する必要があることから、森の三角ぼうしの定休日である月曜が作業初日になるよう設定されている。また、森の三角ぼうしでの展示作業を終えた翌日から、今度はT商店での座敷雛展示を3~4日間にわたって実施することも日程調整の際に考慮されている。最終的には、図3に示されるような状態で、座敷雛が展示されることとなる。以下では、座敷雛展示に関する配置について、図3で示された「右雛壇」や「中央部造景」といった語句で説明することとする。また作業の流れについては、各作業等の開始時刻やその際の写真などを合わせて記載する。

1) 2018年3月7日の作業工程(原材料収集)

当日の天候は若干曇り模様ではあるが晴天で、予定通り作業が開始された。

【9時00分】

メンバー全員が森の三角ぼうし第二駐車場に集合し、軽トラック4台に分乗して作業現場に向かった。

【9時12分】

鬼北町岩谷地区の広見川沿いに位置する、A氏の知人が所有する竹林に到着後、持参した基準となる太さの短い竹と比較しながら、なるべくまっすぐな竹を選んだ上で伐採する(図4)。この作業はA~E氏の男性5人が行い、女性のF氏は道路の草刈りや切り出した竹を運ぶ補助などに従事する。4



図4 竹の切り出し作業  
(2018年3月筆者撮影)



図5 竹の洗浄作業  
(2018年3月筆者撮影)



図6 汚れの多い竹の節部分  
(2018年3月筆者撮影)



図7 洗浄した竹の乾燥工程  
(2018年3月筆者撮影)

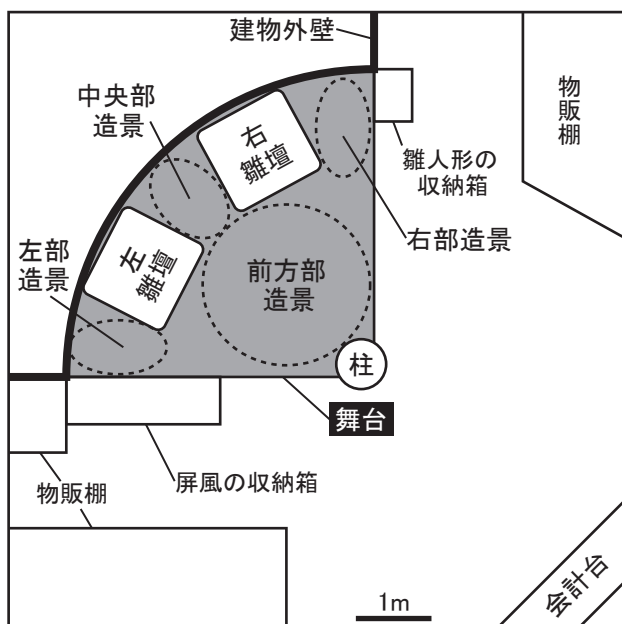


図3 愛媛県鬼北町の道の駅森の三角ぼうしにおける座敷雛展示の見取図  
(現地調査により作成)



m超程度に長さを調整した、比較的太めの竹7本と細めの竹10本を、軽トラック3台に載せる。竹は表面が滑りやすいため、ロープでしっかりと固定する。9時54分に作業を終え、現地を出発した。

【9時57分】

D氏の親戚宅で、現在は空き家となっている場所に先ほど伐採した竹を持ち込み、メンバー全員により洗浄作業を開始した(図5)。竹に水をかけて濡らした後、市販の柔らかいスポンジで洗剤を付けて洗う。竹のフシ部分がとくに汚れているため、丁寧に拭き取る(図6)。ただし、あまり磨きすぎると乾いた後に白いキズが付いてしまうため、加減が必要である。汚れをよく吸着するメラミン性のスポンジも用いる。最後に水拭きした後、ぞうきんで乾拭きし、軒下で乾燥させる(図7)。

太い竹7本を磨き終わった時点で10時23分となり、全ての竹を磨き終わったのは10時34分であった。その後は片づけ作業を10時40分まで続け、少し休憩する。休憩中も、竹の長さの検討や、どの竹をどの場所の展示に用いるかの相談などが行われた。2018年の作業では、当日中に展示場所2カ所に竹を搬入することとなった。おおむね乾燥した竹を再び軽トラックに載せるとともに、午後のコケ採取のためのプラスチック製のコンテナも同時に積載し、11時18分に出発した。

【11時28分】

T商店に到着し、竹の一部を軽トラックから下ろした後、11時36分に出発した。

【11時40分】

森の三角ぼうしに到着後、残りの竹を軽トラックから下ろす。

【11時50分】

森の三角ぼうし内のレストランで昼食をとり、休憩する。

【12時35分】

森の三角ぼうしより、軽トラック4台で次の作業現場へ出発する。

【12時46分】

鬼北町上川地区東部において、コケの採取を開始する。現地到着前の道路にはすでに舗装がなく、山手の川沿いの場所である(図8)。コケは一度採取すると数年は元通りに繁茂しないことから、コケの生えている場所をあらかじめ保存会メンバーが手分けして探しており、年によって採取場所は異なる。男性5人が手分けして、山のさらに奥側や川沿いに生えている様々な種類のコケを採取する(図9・10)。女性のF氏は採取したコケを幅70cm奥行50cm高さ10cmのコンテナに収納する作業を担



図8 コケの採取場所へ向かう山道  
(2018年3月筆者撮影)



図9 コケの採取作業  
(2018年3月筆者撮影)



図10 川辺でのコケの採取作業  
(2018年3月筆者撮影)



図11 コケに付着したゴミを除去し、コンテナに収納  
(2018年3月筆者撮影)



う(図11)。この際、コケについたゴミを取り除くとともに、コケと新聞紙を交互に重ねていく。この日の作業でコンテナ15個分のコケを採取することができた。コケを入れたコンテナを積み込んだ後、13時58分に現地を出発した。

【14時05分】

竹を洗浄した場所へ再び移動し、採取したコケを保管する。コケをコンテナに入れたまま軒下に置き、コンテナを2～3個重ねた後、上からじょうろで水をかける(図12)。その後、コンテナの上から寒冷紗を被せる。作業後、休憩も兼ねながら次回の作業日時を相談する。14時36分に現地を出発した。

【14時40分】

森の三角ぼうし第二駐車場に到着し、この日の作業を終了した。

2) 2018年3月8日～18日の作業工程(原材料収集と手入れ)

造景に必要な桜や桃の木について、つぼみの付いた状態の枝木を収集する。いずれも鬼北町に隣接する松野町内での作業であり、前者は先述のT商店の工場敷地内で伐採し、後者はA氏と知り合いの造園業者から購入する。この際、展示期間中に花が咲いた状態となるよう、枝木を選別する。また、伐採時には脚立に乗っての高所作業も存在する。コケの採取についても、7日の作業と同様に継続された。発泡スチロールや脱脂綿、ブルーシートなどの資材については、松野町内のホームセンターで購入した。また、T商店での展示にのみ使用するものであるが、水田の造景用として発芽してまもない稲を鬼北農業支援センターから購入する。こうした作業は、3月7日の作業工程でも記した通り、あらかじめ保存会メンバー内で日程を調整し、大勢の都合の良い日に実施される。このほか、やはり造景のために用いられる砂利や石、鉢植えなどは、造園業を営むA氏が供出している。

また、採取したコケの管理も重要である。採取後、およそ1ヵ月にわたってコケを枯らすことなく維持する必要があるため、毎日の適正な水やりは欠かせない。この業務については、コケを保管する場所の管理者であるD氏が主にその役割を担っている。

3) 2018年3月19日の作業工程(展示作業1日目)

当日は1日を通して雨模様であったが、作業の大部分は屋内でのものであり、必要となる物品の搬入にも大きな影響はなかった。

【9時00分】

森の三角ぼうし店内において、設営作業を開始する。座敷雛展示のために、あらかじめ森の三角ぼう



図12 採取したコケへの水やり  
(2018年3月筆者撮影)



図13 展示作業開始時の舞台  
(2018年3月筆者撮影)



図14 防水等のためにビニルシートをかける作業  
(2018年3月筆者撮影)



図15 屏風の設置作業  
(2018年3月筆者撮影)

し側が舞台を設置しているが、作業開始時には何も置かれていない（図13）。また舞台の背後には大きな窓があるが、これらは全て青い布であらかじめ覆われており、日差しや外観が遮られている。舞台の上にブルーシートをしわができないように覆い、側面に画びょうを留めて固定する。ブルーシートの足りない部分には、市販の透明のビニルシート（幅150cm程度でロール状になったもの）を切って成形して覆う。

【9時20分】

舞台の最奥に幅64cm奥行き40cm高さ14cmのコンテナを置き、その上にビニルシートを二重にして敷く。ビニルシートはコンテナの下に少しかませるから窓枠部分までのばし、画びょうで固定する。舞台の中央に向かうほど、ビニルシートは高めに延ばし、窓を覆う布とマチ針で固定する（図14）。このような作業をあらかじめ行うのは、座敷雛展示に用いるコケなどに、展示期間中も水やりをする必要があり、その水が舞台下に漏れ出さないためである。また、次の行程で述べる屏風を濡らさないことも意図されている。

【9時32分】

屏風を収納した大きな木箱を舞台に上げ、中から2枚の屏風を取り出す。屏風は高さ160cmほどで6つの板が連なって1枚を形成している。これらを舞台奥のコンテナ上に置き、中央部分で2枚をなるべく連結させる（図15）。屏風を固定するために、コンテナに空いた穴にやや太めの串を入れて支えとする（図16）。

【9時43分】

舞台に高さの異なる2種類のコンテナ（20cmと14cm・幅と奥行きは同じ）を追加し、雛壇の作成を開始する。高いものから34cm、20cm、14cmの計3段を2つ作り、上に板を載せる。側面には目隠しのための板を立てかける（図17）。昨年の展示状況の写真を見ながら、雛壇の配置場所を微調整する。その後、雛壇を赤い布で覆い、画びょうで固定する。また、雛人形などの入った箱を舞台に上げる。ここまでの作業は、男性5人のメンバーが主に行う。

【10時13分】

F氏が主となり、A氏やB氏とともに右雛壇の展示を開始する。まず最上部の御殿の設置から始める（図18）。10時30分頃には御殿がほぼ完成し、続いて人形の展示も開始する。舞台での作業に従事しない残りの3人は、展示に用いる鉢植えや岩に見立てるための大ぶりの石などを店内に搬入する（図19）。10時40分頃に作業を一時中断し、店内の従業員スペースを借りて20分程度休憩する。



図16 屏風の固定作業  
(2018年3月筆者撮影)



図17 雛壇の準備  
(2018年3月筆者撮影)



図18 雛人形の展示作業  
(2018年3月筆者撮影)



図19 造景に用いる大きい石  
(2018年3月筆者撮影)



【11時00分】

作業を再開し、6人全員で雛人形の展示を進める(図20)。主にA氏とF氏が飾り付けを行い、残りの4人は人形を箱から出す作業などを行う。左雛壇の御殿の組み方が難しく、過去の写真を参考に組み立てていく。11時40分に左雛壇の御殿が完成する。右雛壇の人形の配置や付属品の調整などに移り、11時50分にこの作業が完了する。

【11時32分】

上記作業と並行して、右部造景の作成を開始する。コンテナと発泡スチロールを組み合わせて山の土台を形成していく(図21)。11時50分からは、左部造景および中央部造景の作成も開始する。この2つの部分には、桜や桃の木を活けるための大きなバケツも設置される。棟梁のA氏が造景を考案し、自ら作業を中心的に進めるのと同時に、必要となる物品の搬入も含めて、男性5人がこの作業に従事する。このほか、雛壇の幅に合わせて小ぶりの竹を切る作業も行う。

【11時57分】

左部造景の屏風に近い部分の土台の上に、透明のビニルシートを被せ、土台づくりを終える。作業の際は、奥にある屏風が濡れないよう、ビニルシートの配置を十分に確認する、

【12時00分】

昼食休憩のため、近隣のレストランに移動する。これは、森の三角ぼうしが定休日、店内レストランも休業しているためである。

【12時55分】

作業を再開し、まず右部造景および中央部造景の屏風に近い部分に、透明のビニルシートを被せる。また、左部造景および中央部造景に配置されたバケツに水を入れる。

【13時40分】

薄手の毛布を右部造景の土台の上に被せる作業を始める。景色の一部となる大ぶりの石も置かれ始める。毛布の上に採取したコケを被せる(図22)。美しい色合いを出すために、種類や色の異なるコケを組み合わせながら配置していく。コケを配置する最中にも、土台部分の起伏を微調整する。14時06分に右部造景の山がひとまず完成する(図23)。

【14時18分】

中央部造景の土台に毛布を被せつつ、土台の形状を調整する。発砲スチロールを削った際に出た粉やコケから落ちた土などを、舞台上からこまめに取り除く。奥側のコケを配置した後、14時34分につぼみ状態の桃の木が搬入され、バケツに活けた後に結束バンドで固定される。木をうまく立たせることが



図20 保存会メンバー全員の作業風景  
(2018年3月筆者撮影)



図21 右部造景の土台作り  
(2018年3月筆者撮影)



図22 コケを置き山を表現する工程  
(2018年3月筆者撮影)



図23 完成した山の造景  
(2018年3月筆者撮影)



難しいものの、迫力を出すためになるべく多くの本数を活けるように工夫する(図24)。一方で、桃の木の枝が雛人形や屏風に接触しないよう、適宜剪定する。14時55分に中央部造景がほぼ完成する。

【15時00分】

左部造景の作業を開始するが、棟梁のA氏がすでに作業を終えた右部造景に川の流れを作ることを提案し、その作業に移行する。すでに配置されたコケや石の一部を取り除き、山の中央を流れる急流を表現できるスペースを確保する。15時15分から30分間、従業員スペースで休憩する。

【15時45分】

作業を再開する。16時頃には桜の木がバケツに活けられ固定される。あらためて左部造景の作業が進められ、16時10分に完了する。

【16時10分】

右部造景の修正作業に再び移行し、白い砂利や脱脂綿を置きながら急流を表現していく。脱脂綿は置く前に少しほぐしてやや糸状になる部分をつくり、視覚的に流れを感じやすくする(図25)。

【16時20分】

前方部造景に敷く大小の砂利を舞台上に載せる(図26)。新たなコケなども搬入されると同時に、翌日は森の三角ぼうしの営業日であるため、使い終わった資材やゴミの片付けなども進められる。

【16時30分】

中央部造景の前部分を修正する。植木鉢を置き、その上にコケを敷くことで実際に木が植わっているような景色を作り出すとともに、さらにその前に大ぶりで形状が独特の石を配置する(図27)。

【16時43分】

森の三角ぼうしのモニュメントである鬼王丸のミニチュアを、左雛壇手前に設置する作業が始まる(図28)。鬼王丸の台座に合わせて発泡スチロールでさらに台を作って載せ、その周囲を大小の石で囲む。さらに台座自体が見えなくなるよう、砂利を敷



図25 川の流れを新たに付け足された山の造景  
(2018年3月筆者撮影)



図26 舞台上に置かれた展示用の原材料  
(2018年3月筆者撮影)



図27 岩を表現する工程  
(2018年3月筆者撮影)



図24 中央部造景に桃の木を設置  
(2018年3月筆者撮影)



図28 鬼王丸の設置作業  
(2018年3月筆者撮影)



き詰める。

【17時05分】

この日の作業を終了し、解散する。1日間の作業により、雛壇とその周囲の造景がおおむね完成した（図29）。

#### 4) 2018年3月20日の作業工程（展示作業2日目）

この日の天候も曇り時々雨であったが、物品の搬入等への影響はなかった。一方、同日は森の三角ぼうしの通常営業日であることから、物品の移動や設置などにおいて、来店客の妨げとならないよう、配慮がなされた。

【9時00分】

8時50分頃から徐々にメンバーが集まり、9時頃には自然と作業が始まった。棟梁のA氏が中心となり、前日最後に設置した鬼王丸の向きを修正する作業を行い、9時15分に完了した。また、展示する家の模型の土台となる木枠をE氏らが組み立てた。

【9時20分】

B氏ら数人により、小ぶりの鉢植えなどが次第に造景に追加され、その上にコケが敷かれる。この際、コケに水分を含ませるために、丸めて水を含ませた新聞紙を鉢の周りに置き、その上からコケを敷く。一方で、左雛壇手前に闘牛の風景を配置するべく、A氏が作業を開始する（図30）。

【9時30分】

前方部造景に砂利を敷き始める。砂利は1cm四方程度の大きさで、やや白っぽいものが用いられる（図31）。砂利を敷いた後、小ぶりのチリトリや板切れで表面をならして、滑らかにする。こうした作業は、次に述べる竹の設置作業中も少しずつ継続され、ところどころには小さめの石を配置することで、多様な風景となるよう、工夫されていた。

【9時37分】

B・C・D・E氏の男性4人が中心となり、舞台の外枠となる竹の長さを調整し始める。舞台最前面に存在する柱の形状に合うよう、竹に斜めに切り込みを入れる（図32）。設置の際には、柱を傷めないよう、竹の断面と同じ形に加工した段ボールを挟む。竹を設置した内側には、砂利が舞台からこぼれ落ちるのを防ぐため、断面が三角形で木製の細い棒を設置する。竹を固定するために、竹の両側と中央部にE氏が電動ドリルで小さな穴をあけ、ここに針金を通して、舞台上に敷かれたブルーシートの穴などにも通すことで竹が固定される。この作業を、舞台の左側、右側の順に実施し、最終的にはメンバー総出で固定作業に取り組み、10時33分に完了した。



図29 1日目の作業終了時の様子  
(2018年3月筆者撮影)



図30 闘牛の様子を表現する工程  
(2018年3月筆者撮影)



図31 前方部造景に砂利を敷く工程  
(2018年3月筆者撮影)



図32 展示の外枠として竹を設置する作業  
(2018年3月筆者撮影)



【9時49分】

地元のケーブルテレビが取材に訪れる。カメラマンを兼ねた女性記者1人が、保存会メンバーや森の三角ぼうし経営者らにインタビューを行うとともに、作業風景を撮影する。例年は座敷雛展示が開始されてからの取材であったが、今回はこの作業の実施日と同じ3月20日に作業の様子を報道し、21日からの展示開始を周知する目的であったという。また、展示開始後にもあらためて撮影に訪れることが保存会メンバーらに伝えられた。この取材は、前述の竹の固定作業が完了するのとはほぼ同じく、10時34分まで続けられた。

【10時22分】

A氏によって闘牛場の作成が継続され、最終的に図33のような造景となった。

【10時35分】

A氏とC氏は右部造景をさらに修正し、鉢植えを置いた後、山の上に生えた木に見立てるため、植木鉢を隠すようにコケを置くなどの工夫をこらす。B氏とE氏は舞台左側奥に設置するための垣根の調整を行う（図34）。D氏は砂利や小石の配置、F氏は左部のコケの配置の調整など、メンバー全員が様々な役割を担いながら作業を進める。10時43分には、先ほど調整された垣根が設置され、これによりその近辺に配置された大型の植木鉢の目隠しにもなった。

【10時50分】

右部造景から前方部造景へと川が流れる風景を表現するために、より白い砂利が敷かれ始めるとともに、橋の模型が舞台上に設置される（図35）。また、舞台後部の造景の修正がおおむね終了したことから、森の三角ぼうしから借りた電動の噴霧器を用いて（図36）、C氏が植物に水をかけて回る（図37）。展示中も舞台上に上がってこうした手入れ作業が必要となるため、造景の配置には工夫を要する。



図34 舞台左側奥に設置する垣根の調整作業  
(2018年3月筆者撮影)



図35 川の表現のために舞台上に設置された橋の模型  
(2018年3月筆者撮影)



図36 展示に用いられた植物の水やり用の噴霧器  
(2018年3月筆者撮影)



図33 完成した闘牛の風景  
(2018年3月筆者撮影)



図37 植物の維持のための水やり作業  
(2018年3月筆者撮影)



【11時00分】

店内の従業員スペースを借りて休憩する。

【11時15分】

作業を再開する。植物への水やり、川の表現のための砂利敷き、その周辺部への小石配置、大ぶりの石の設置などを、メンバーが手分けして進める。大ぶりの石のまわりには、コケを付けることで、岩に見立てた自然な風景となるよう工夫がなされた。最終的な配置はA氏が微調整して決定する。また11時35分頃には、F氏が作成した民家の模型が川沿いに配置された(図38)。

【11時50分】

F氏が川面やその近辺に亀や白鳥などの小ぶりの模型を配置した。このうち亀は、小さな貝殻6つをつなぎ合わせて、F氏が自作したものである。また、作業が終盤となったことから、D氏は雛壇に付着した小さなゴミなどをガムテープに付着して除去するなどの清掃作業に従事していた。

【11時57分】

森の三角ぼうし内のレストランで昼食休憩をとった。

【12時45分】

A氏、B氏、F氏が作業を再開し、保存会メンバーが「まな板」と呼ぶ、お供え用の台座を舞台左前方に設置する作業を行う(図39)。12時55分頃にはメンバー全員がそろい、各自作業を進める。

【13時02分】

B氏とE氏が舞台下に紅白の幕を設置し始める。これにより、展示全体が華やかになるだけでなく、舞台下の目隠しにもなる。この作業は13時20分に完了した。またD氏は、残った竹を用いて花活けを作成し、菜の花を活けて「まな板」の上に設置する。

【13時05分】

A氏が川の一部を修正し始める。敷き詰めた砂利の一部を取り除き、そこへ20×10cmほどの鏡を置く(図40)。その後、再び砂利を鏡の四隅に敷くことで、13時18分には展示が川面に反射して見える造景を作り出した(図41)。

【13時24分】

E氏やF氏が、雛人形の入っていた木箱を舞台右側奥へ移動させ、箱の上に今回の展示題目である「鬼雛の街道」と記した立て掛けを置いた。また、屏風を収納していた大型の木箱については、舞台左側奥へ移動させ、来訪者の記帳台として活用する。また、男性メンバーが中心となって、余ったコンテナなどの物品の撤去や、舞台周辺の清掃も行った。

【13時33分】

全ての作業を終え、冒頭で示した図1の座敷雛展



図38 F氏が作成した小屋の模型を設置  
(2018年3月筆者撮影)



図39 「まな板」の設置作業  
(2018年3月筆者撮影)



図40 川面の反射を表現するために鏡を設置  
(2018年3月筆者撮影)



図41 完成した川の造景  
(2018年3月筆者撮影)



示が完成した。ほぼ同時刻に鬼北町長が来訪し、出来ばえについて大いに感心し、保存会メンバーに感謝の意を伝えていた。この後、さらに若干の清掃作業が行われた。

【13時40分】

清掃作業が終わり、保存会メンバー自身が座敷雛をじっくりと鑑賞するとともに、メンバー同士や関係者ら、あるいは来訪客との間で歓談がなされた。最後に座敷雛を背景にメンバー全員の記念撮影が行われた後、全メンバーは翌日から作業を開始するT商店へ、下見のために移動した。

なお、展示の解体作業については、4月上旬の展示終了後、やはり森の三角ぼうしの定休日である月曜1日間で完了している。

#### 4. 座敷雛展示に関わる作業工程の成立要因

本章では、今回取り上げた座敷雛展示の作業工程の内容をしぼって、その成立要因について考察する。あらためて作業工程全体を俯瞰すると、次の4つがとくに重要と位置付けられる。すなわち、

- ①主たる原材料となる植物の収集と継続的な管理
- ②準備も含めた作業工程に必要となる時間の確保
- ③展示に必要な造景や雛人形の取り扱いに関する知識や技術
- ④作業を円滑に進めるための保存会メンバー同士の協力体制

である。

そしてこれらについては、以下の4つの要素が複合的かつ多面的に機能することによって、実現されていることが考えられる。第一に、①や②に関係するものとして、保存会メンバーがいずれも70歳代以上であり、恒常的な職務からリタイアしている、あるいは自営業である、といった点から、比較的自由な時間を確保しやすい点が挙げられる。とくに展示作業においては、2日間でメンバー全員がそろって集中的に作業を展開する必要がある。第二には、主に①に関して、農村部での活動であることが、展示に用いる植物の収集に有利に働いていることが挙げられる。また、普段の農作業のために軽トラックを所有している者が多いことも、原材料の運搬には有効であったといえる。さらに採取した植物を、現在は空き家となっているD氏が管理する物件の敷地内で保管できたことも、活動にとって有利に働いた。第三に、主に③に関係した内容として、A氏やE氏が造園技術を有し、また、唯一の女性メンバーであるF氏が雛人形の展示に関する知識を有していたことが挙げられる。そして第四に、④の実現において、活動に意欲や関心のある面々が集まり、その中には旧知の間柄であった者も含まれたこ

ともあって、まさに少数精鋭による支え合いや密なコミュニケーションが発生したことが考えられる。このことはまた、①～③においても、個々の能力を生かした分業やメンバー全員での共同作業など、座敷雛展示を滞りなく進めるうえで有効に作用したと位置付けられよう。

ただし逆にいえば、加齢によって体力や認知機能が衰える中で、自動車の運転や大型ないし重い原材料の運搬が次第に困難になることが想定される。作業工程にもみられるように、立ち仕事や中腰での作業を長時間行うことも多く、身体的な負担は大きい。また、こうした理由によってメンバーが脱退することにより、作業工程全体の長期化や展示内容の縮小、さらには展示自体の中止をも余儀なくされることにも結びついてしまうであろう。本稿の調査の翌年に、保存会メンバー自身が活動の中止を計画的に決定したことは、まさに上記のような問題を直視した結果とも推察されるのである。

#### 5. おわりに

本稿では、全国的に稀有な手法である座敷雛の展示に注目し、愛媛県鬼北町において1990年代半ばから25年間にわたって継続された座敷雛展示について、2018年3月に道の駅森の三角ぼうしで開催された展示を対象として、その作業工程を記録した。その際、この座敷雛展示が地域の文化資源としての価値を有するものとみなし、将来的にこの活動が何らかのかたちで復刻された際の情報源として本稿が活用されることも視野に入れながら、作業工程についてなるべく詳細に記述することとした。

鬼北町における座敷雛展示は、A氏をリーダーとする「きほく座敷雛保存会」のメンバーである住民有志数人によって実施され、10数畳ほどの舞台に雛人形と植物を主な原材料とする造景が展開された。この行事は3月下旬から4月上旬に開催され、町内2ヵ所の展示には数千人が訪れる恒例行事にまで発展した。本行事の継続には、保存会メンバーの知識・技術の活用や、メンバー同士の協力関係が有効に作用していた。保存会メンバーの高齢化を主な理由として、2019年の展示をもって本行事は終了したが、その文化的な重要性や再活用の可能性は高いと考えられ、その際に本稿の内容がいくばくかでも生かされることを期待したい。

#### 付記

本稿の調査を実施するにあたり、きほく座敷雛保存会の上本與忠氏をはじめとする保存会メンバーの皆様には、好意的に受け入れていただき、多大なるご協力を賜った。

この場を借りて厚く御礼申し上げるとともに、25年間にもおよぶ活動を継続されたことに深い敬服の意を表したい。

本稿の内容の一部は、2018年6月16日に開催された地理空間学会2018年(第11回)大会において発表した。なお、鬼北町の座敷雛展示に関する活動の経緯やその変化の詳細については、「愛媛県鬼北町における座敷雛展示にみる文化の伝播・継承・保存活動の特色」として学術誌『地理空間』に投稿予定である(池田彩乃氏との共著)。

#### 参考文献・URL

古河佳子(2018): 地域振興の全国的展開と開催地域間の連携－観光ひなまつりを事例として－. 日本地理学会発表集, 93, 308.

まあなの座敷雛ウェブページ

<http://maana-zashikibina.com/>

(最終閲覧日: 2019年12月4日)

山田慎也(2015): 地域おこしとしての雛祭り－徳島県勝浦町のビッグひな祭りの事例を通して－. 国立歴史民俗博物館研究報告, 193, 95-112.